

## 番組「血をこえて… “わが子” になった君へ」を見て

今、朝ドラで里親家族が取り上げられているが、ドキュメンタリー番組「血をこえて… “わが子” になった君へ」を見た。

この番組は、ある新聞に掲載される里親募集の記事が縁で、ある女の子の里親になろうと乳児院に通い、待望の引き取りの日を迎え、家族作りの試行錯誤の日々の若い夫婦と、3人の子どもを数年おきに迎え育てている夫婦と、2つの家族の日々の様子が取材されていた。

若い夫婦は、初めての子育てに戸惑いながらも、支援機関のアドバイスを受けながらも日毎に親子の絆が深まる日々。

3人の養母は、3人の子どもを寝かせながら、「ふたりのおかあさんから あなたへのおくりもの」の童話を読み聞かせている。

この夫婦の小学生の長女は、取材記者に「私の宝物を見せてあげる。」と、出産時の自分の足紋の色紙を見せながら、「私の夢は、これを手がかりにお母さんを探すこと。」という。

そして、「お母さんを探すのを手伝ってね」と養母に甘えて抱かれながらお願いし、養母は笑顔で「20才になったら、一緒に探そうね」と応える。

取材記者の「血の繋がって、どう思う？」の問いに、中学生になった長男は、「普通に、お父さん、お母さんと呼べたら、OK！他に何んも変わらないよね」と、側の血の繋がらない妹弟にも語りかけていた。

様々な事情で子どもを産んでも育てられない親……、一方、様々な事情で子どもを授からなかったが里子として子どもを育てる親……。

先に、当 HP で子どもにとっての『オ母サン』とは、「単に遺伝子上、また、戸籍上での親のことをいうのではなく、子どもにとっていつも身近にいて生きていて元気を貰える存在の人（「雑学BN」の、メル友・コメント等関係（IV）、2007.06.12.「なぜ『オ母サン』という書き方をするのですか？」：参照）」と触れた。

それだけに、ごく最近も親子関係の心情のすれ違いからか青少年による報道事件に接すると、親子が親子であるためには、まず、“My child is not only mine, but also a person.”（「雑学BN」のメル友・コメント等関係（IV）、2008.02.13.：参照）の観点を抱きつつ日々の子育てが必要でないだろうか、ふと思った